Japanese Physical Therapy Association

理学療法学 第21巻 学会特別号(第29回青森) 1994年

297. 当院における未熟児の早期療育

【キーワード】
未熟児・NBAS・早期療育

長崎大学医学部附属病院
大城　昌平・穐山富太郎・福田　雅文
横山　茂樹

＜はじめに＞

我々はブラゼルトン新生児行動評価(以下、NBAS)を発達障害を予測される未熟児や成熟児を対象に臨床応用し、現在まで124名の未熟児を評価した。そのうち19名の未熟児に発達障害の予測される所見が見いだされ早期療育を試みた。19症例のうち精神運動発達遅滞が予測された児16名、中枢性発達障害が予測された児３名であった。前者には呼吸器障害を合併した超未熟児が多くを占め、後者は小児科的リスクは見当たらなかった。

＜新生児行動の特性＞

NBASの結果から発達遅滞の予測された未熟児では新生児行動の生理系、意識状態の調整系、運動調整系、相互作用系の４つの行動発達基盤の獲得遅滞とともに、内的・外的な要因からストレスを受けやすくストレスを伴った脆弱な行動反応を示す傾向にあった。

＜早期療育プログラム＞

我々の早期療育の基本的な考えは新生児行動の特性に合った両親の療育行動を援助し、前述した４つの行動能力の獲得と行動学習を育む環境を提供することであり、生活指導を重視し、日常の取り扱いのなかでより良い感覚・運動の経験学習を促すことを基本にしている。このような考えから、未熟児ではコット移床後にNBASの評価を実施し、母児同室を通じて以下のようなプログラムを母親指導している。

①母子相互作用の発達援助：初期段階は母子関係の発達を重視する。NBASを介入手段として母親とともに児の行動を観察し、その能力の認識と問題行動に対する解決方法を指導する。

②睡眠－覚醒リズムの発達援助：生活環境のなかに太陽周期に基づいた夜間の睡眠と昼間の覚醒に留意する。睡眠中には急激な強い光・音・接触刺激が加わらないよう留意し、昼間の授乳後の３０分から１時間ぐらいはストレスが加わらない程度の前庭・触覚・視聴覚刺激を与えながら遊びの時間を設け、睡眠と覚醒状態の調整に努める。

③覚醒時の取り扱い：適切な取り扱いを行う上ではストレスの兆候を理解することが重要である。ストレスを受けやすい児ではストレスの現れに応じて緩やかなロッキング、抱擁を用いて敏括状態を維持しながら、次第に触覚・視聴覚刺激を重複強化していく。触覚刺激は徒手による体幹・四肢のマッサージから始め、視聴覚刺激は母親のみつめかけや語りかけ、玩具などを用いて、１点の注意集中から始める。また、口周辺や手の感覚や、口－手－目の協調性獲得にも留意する。興奮状態には自己鎮静のタイミングを待って、なだめの手技による段階的な働きかけを指導する。

④運動発達の援助：正常な運動感覚を学習させるには急性期からのポジショニングを指導する。日常の寝かせ方やだっこ姿勢の中で、頭部・体幹・四肢の抗重力姿勢調整反応の発達と上肢の正中位指向の発達に留意した取り扱いを指導する。積極的な運動発達指導は生理的安定と覚醒状態の安定が得られ、ストレス反応の軽減した段階から行う。初期には臥位での頭部・体幹の立ち直り反応と四肢の抗重力活動の促通を中心としたアプローチを実施し、次第に抗重力姿勢での姿勢反応の獲得を目標としている。また、胸郭運動の乏しい児には呼吸介助手技等の呼吸訓練も取り入れている。

⑤哺乳練習：呼吸機能の改善とともに吸啜－嚥下機能も改善してくるが、一部には神経学的問題や口周辺・内の感覚の過敏性を有する場合もある。このような児に対しては指や手を用いての口周辺・内、舌の刺激練習を実施し、哺乳時の姿勢などを考慮する。

＜母児同室前後のNBAS評価結果＞

母児同室前後のNBASの評価結果を比較検討した。State control、Orientation、Supplement Itemsのクラスターで改善し、全般的に安定した行動への変化傾向がみられた。これは児本来の発達に加え、NBAS評価と母児同室指導を通して母親の療育行動を援助し、母親の取り扱いに対する認識や精神的な安定が、児の行動反応に影響した結果であると思われる。

＜終わりに＞

未熟児のNBASによる評価結果から我々の実施している療育プログラムについて報告した。NBASは早期の発達障害の査定と介入を図るうえで有用な評価法であり、このような早期の療育が児とその家族を援助し、発達を促すものと思われる。

NII-Electronic Library Service